

ポリフォニック・アフタータッチ・パフォーマンス・テクニク

はじめに

ポリフォニック・アフタータッチは、Fourm が誇る最も表現力豊かな機能のひとつであり、あなたの演奏とアナログ・シンセシス・エンジンとを直接的かつ繊細に結びつけます。微細なダイナミクスから劇的なジェスチャーまで、他の演奏コントローラーでは実現できない新しい表現の可能性を開きます。

しかし、ポリフォニック・アフタータッチはまだ比較的珍しいため、その効果的な使い方に関する情報は多くありません。そこで本ガイドでは、テクニクやアイデアをまとめました。名人級の演奏力がなくても素晴らしい結果を得られるようになっています。このガイドは、ポリフォニック・アフタータッチが音楽にもたらすものに興味を持つすべての方のためのものです。

ここで紹介するものには、具体的な演奏アプローチもあれば、ポリフォニック・アフタータッチ対応キーボードを弾いているうちに自然と発見できるものもあります。目的は、Fourm を最大限に活かし、ポリフォニック・アフタータッチがいかに表現豊かで魅力的であるかを示すことです。

テクニク一覧

Almost Bi-Timbral(まるでバイティンバーのように)

アフタータッチでフィルターが開くパッチを使用します。左手では穏やかなトライアド（和音）を弾き、右手ではメロディーラインにしっかりと圧力をかけて明るい音色を引き出します。この音色のコントラストによって、まるでスプリット機能を使っているかのように、同時に2つの異なる音を演奏している錯覚を生み出せます。

試してみましょう：

06 Sakamo

29 More Than That

Arp Evolutions（アルペジオの発展）

アルペジエーターをオンにして、3～4和音を押さえます。パターンが循環する中で、指の圧力を変えて特定の音を強調し、ポリフォニック・アフタータッチを活用します。両手を使うと、特定の音を強く押さえるのがさらに容易になり、その音がシーケンスの中で際立ち、アルペジオにダイナミックなフレー징ングを加えることができます。

試してみましょう：

07 Mod My Arp

72 Plucky Arp（ARP MODE を Random から Down に変更し、キーボードを -1 オクターブにトランスポーズの設定で試してください）

74 Toms

アルペジオの発展 — 追加メモ

このテクニクは、アルペジオパターンに新しい生命を吹き込みます。それは、すべての音に対して「フィルターつまみを回してスウィープする」という一般的な手法を超え、ダイナミックに進化する表現です。

もちろん、押さえた全ての音に均等に圧力をかけることで、一体感のあるモジュレーション効果を作ることでもあります。これにより従来のフィルタースウィープも再現できますが、ポリフォニック・アフタータッチをアンプレベル (VCA) や LFO の深さといった他のパラメータにルーティングすると、より表現豊かになります。まるでパッチ全体をモーフ

ングしているように感じられ、しかも各キーごとにコントロールできるのです。

試してみましょう：

30 Unisyncerizer (ARP MODE を Seq Note ではなく Up に設定してください)

ピッチへのルーティング

アフタータッチをピッチにルーティングすると、独特の効果が得られます。個々のノートに持続的なベンドが加わり、有機的で予想外な表情と動きをもたらします。

試してみましょう：

42 Mini Prophet (Seq Note の代わりに ARP MODE を Up+Down 1 に設定してください)

Tremolo on High(高音域でのトレモロ)

トレモロやビブラートは単音に感情的な深みを加えますが、低音域では不安定に感じられることが多いものです。そのためベースギタリストはほとんどビブラートを使わず、またピアノの低音域で広いピッチ変動をかけると音の中心が揺らぎ、ぼやけてしまいます。

ポリフォニック・アフタータッチはその解決策を提示します。左手でベースノート、あるいは広い 10 度音程を保持しながら、右手でリードノートや和音を弾きます。そして高音側のノートにだけ指の圧力で繊細なビブラートやトレモロを加えます。これにより低音は安定を保ちつつ、高音域に上品で音楽的な揺らぎが加わり、洗練された質感を得られます。

試してみましょう：

02 Four Keys

04 Eeee Peee

24 Organic Fourm

Pedal Meddle(ペダル・メドル)

左手でベース音を交互に刻み、右手でリズムカルな和音を弾くという奏法は、キーボード奏法の定番です。大きな鍵盤では、左手でオクターブを交互に弾くことで推進力を生みます。

ポリフォニック・アフタータッチを使うと新しいひねりを加えられます。アフタータッチでベース音のピッチを 1 オクターブ下げるようにモジュレーションし、和音の下で揺らぐペダルトーンを作り出すのです。その間、右手はコードやメロディ、リズムパターンを自由に弾いてもピッチが影響されません。これにより Fourm のコンパクトな鍵盤範囲でも、低音と和声の明瞭さを保ちながら演奏できます。

試してみましょう：

24 Organic Fourm (Aftertouch を Freq A と B にアサインし、Amount ノブを 1 オクターブ下がるよう設定してください。4 度下も試してみましょう。)

Pedal Meddle – 追加メモ

変化をつける方法として、左手でベースノートを保持しながら右手でトライアドを弾き、そのままベースノートを保ったままトライアドを 1 オクターブ上に移動する、というアプローチも効果的です。

試してみましょう：

• **42 Mini Prophet**

Bass Underlay(ベース・アンダーレイ)

ユニゾンパッチ、特にベース用のパッチで有効なテクニックです。左手で低いペダルノートを保持し、右手で短くリズムカルなフレーズを弾きます。左手を押さえたままにすることで、ユニゾン動作は常に元のピッチに戻り、音の土

台をしっかり支えます。このとき右手のノートにはポリフォニック・アフタータッチを加えて強調やニュアンスを与えますが、左手の安定した低音には影響しません。結果として、安定したベースと表情豊かなアクセントのコントラストが生まれ、通常のユニゾン・スタブよりも生命感のあるテクスチャになります。

試してみましょう：

49 Br0 Presh Bazr

Long Release(ロング・リリース)

エンベロープのリリースが長いプリセットでは、モノ・アフタータッチやモジュレーションホイールといったグローバルな変調ソースが、まだ減衰中のノートにも作用してしまい、望まない影響を与えることがあります。ポリフォニック・アフタータッチなら、長いリリースのノートには影響を与えず安定した背景音を保ちながら、新しく弾いたノートだけに表情豊かなモジュレーションを加えることができます。極端なアーティキュレーションでも、新規のノートにのみ反映されるため、安定感と動的な表現の両立が可能です。

試してみましょう：

16 Lonely Star

B-Bender Style Pitch Articulation(B-Bender スタイルの奏法)

ギタリストは、複数の弦を押さえながら特定の音だけをベンドさせることで、独特でエモーショナルな響きを作ります。B-bender やペダルスティールのような機構もそのために用いられます。Fourm でも同様の効果を得られます。ポリフォニック・アフタータッチをピッチにルーティングし、ベンドレンジを2〜3セミトーンに設定します。2つのキーを押さえ、そのうち1つにだけアフタータッチを加えると、その音だけが表情豊かに動き、もう一方は安定したままになります。これによりギター的なフレー징を忠実に再現できます。広い音域で正確にピッチを狙うには多少のコツがありますが、ベンドレンジを丁寧に調整すれば、満足度の高いギターライクな表現が指先で可能になります。

試してみましょう：

12 FingerTimbres (Aftertouch を LFO FRQ からオフにして、FREQ A と B にオンにしてください)

Complex Modulation(コンプレックス・モジュレーション)

シンプルなパッチにも、ポリフォニック・アフタータッチを使って各ボイスに個別の LFO を持ち込むことで奥行きと動きを加えられます。これにより音が有機的に発展し、各ノートが独立して成長するよう感じられます。ベーシックなパッチでも、微妙な変化が加わることでリッチで生き生きとしたサウンドになり、指先の表現に応えるものとなります。

試してみましょう：

83 A Square Deal

15 Sensitive Soul

Pressure Play(プレッシャー・プレイ)

ポリフォニック・アフタータッチをフィルターやアンプリチュードにルーティングすると、各キーの圧力でノートをコントロールでき、アタック、ボディ、リリースを正確に操ることができます。繊細なタッチと適切に調整されたキーボードのレスポンスカーブが必要ですが、その結果は非常に表現豊かになります。このテクニックを使うには、まず指をキーに置いた状態から音を出す準備をし、その後、圧力を選択的にかけてノートをフェードイン／フェードアウトさせます。これにより各声部を動的にコントロールでき、まるでアコースティック楽器のように、一音一音に生命を吹き込むようなフレーズ表現が可能になります。

試してみましょう：

39 Floot (ユニゾンをオフにし、Aftertouch を FILT と AMP にアサイン。Amount ノブを最大に設定してください)

125 Hyper Duck

Subtle Expression(精巧なエクспRESSION)

アフタータッチの使用は常に大胆である必要はありません。控えめな設定で使うことで、音に穏やかなニュアンスや進化を加えられます。個々のキーに徐々に圧力をかけていくことで、音色にさりげない変化を生み出し、各ノートを用意的に形作ることができます。静かな意図を持って演奏することで、シンプルなパッチでも生き生きと感じられるでしょう。

試してみましょう：

86 Echo Repeat

66 Slow Fourm

Chord Roll(コード・ロール)

ポリフォニック・アフタータッチは、コードのアルペジエーションやストラム奏法に新しい次元を与えます。ひとつのアプローチは、手首から手を転がすように圧力を変えていくことで、自然で流れるような動きでアフタータッチを発動させる方法です。

逆に、個別のノートに意図的に圧力をかけて、キーごとにアフタータッチを発動させることもできます。もちろん、どちらか一方だけでなく両方を組み合わせることで、自然な動きと意図的なコントロールを融合させ、より豊かな表現を得ることも可能です。

試してみましょう：

08 Fourmer Brass

29 More Than That

Negative Modulation(ネガティブ・モジュレーション)

ポリフォニック・アフタータッチは通常、音の要素を加えるために使われますが、逆にそれらを取り除くことも可能です。フィルターのカットオフ、アンプレベル、LFO の深さなどにポリフォニック・アフタータッチをマイナスでルーティングしてみてください。音の要素を削ぎ落としたり、完全に消したりすることができます。

このジェスチャーは「音を生み出す」行為から「音を消す」行為へと転換し、演奏の発想を変えてくれるかもしれません。ノートを鳴らすのではなく、その不在をコントロールすることによって、予想外の音楽的アイデアにつながります。

試してみましょう：

48 Jovia Luna

109 Depth Charge MW

Slight Vibrato(スライト・ビブラート)

サステインしているノートを押さえたまま圧力を変化させることで、自然なビブラート効果を得られます。ただし、キーを上下に押すだけで圧力を均等にコントロールするのは容易ではなく、特に繊細なモジュレーションでは難しい場合があります。

代わりに、ノートを押さえたまま腕を左右にゆっくり揺らしてみてください。この動きによって自然に垂直方向の圧力変化が生まれ、直感的で表現力豊かな滑らかなビブラートが得られます。キーを真下に押し込むよりも、意図したとおりの効果を出しやすいことが多いです。

試してみましょう：

12 FingerTimbres

51 Ana-Strangz

LFO Notes(LFO ノート)

鋸波 (Saw) 形の LFO を使って、繰り返し動作するエンベロープのようなモジュレーションを作り、それをポリフォニッ

ク・アフタータッチで選択的に呼び込んでみましょう。これにより、特定のノートだけにリズムカルな動き（パルス状のアンプリチュード変化やフィルタースウィープなど）を加えることができます。

例えば、繰り返すベースラインを構築してその上でソロを重ねることもできますし、持続音（ドローン）の上にリズムカルなコードを重ねることも可能です。あるいはその中間的なアプローチでも構いません。ひとつひとつのノートに動きと複雑さを加える強力な方法です。

サウンドの作り方（例）

1. TRANSPOSE を押しながら PROGRAM を押し、Basic Program を呼び出します。
2. MODULATION セクションで、青の LFO ボタンを赤に切り替え、Amount ノブを 0 に設定します。
3. MODULATION DESTINATIONS セクションで、CUTOFF ボタンを赤に切り替えます（ラベルに「cutoff」が表示されます）。
4. AFTERTOUCH セクションで、FILT をオフ、LFO AMT をオンにし、Aftertouch Amount ノブを 2 時方向に設定します。
5. LOW FREQUENCY OSCILLATOR セクションで、SAW をオン、TRI をオフにします。
6. この状態でアフタータッチをかけると、かすかなリズムパターンが聞こえます。ここでフィルターを調整し、その効果を強調します。
7. Filter セクションで、KEY TRACK ボタンを押して点灯させます。
8. CUTOFF ノブを真上（12 時方向）に回します。

これで、LFO ノートのテクニックを試すためのサウンドが完成しました。ここから名前を付けてユーザーバンクに保存することも、さらに自分好みに編集を続けることもできます。

おわりに

このガイドが皆さまの参考になれば幸いです。しかし、これはほんの始まりに過ぎません。Fourm を弾き込むほどに、ポリフォニック・アフタータッチならではの新しいテクニックを、きっとご自身で発見できるでしょう。

2025 年 9 月作成

Fourm ポリフォニック・アフタータッチ・パフォーマンズ・テクニック

Sequential 製品 日本総輸入代理店 有限会社 福産起業

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 1-14-2 ルポンテビル 4F

Tel : 03-3746-0864 / Fax : 03-3746-0865

ホームページ : fukusan.com

サポート : support@fukusan.com

本マニュアルの無断複製・転載を禁じます。

©2025 Fukusankigyo co., Ltd All rights reserved.